



2025～2026 年度
RI 会長メッセージ

UNITE FOR GOOD
よいことのために手を取りあおう

豊橋北RC
会長テーマ

利他と言う高みに登る為に
本気でやるべきことを
皆でやりましょう

2760 地区

例会日=毎週火曜日 12:30 例会場=ホテルアークリッシュ豊橋 会長 高坂泰弘 副会長 酒井和良 幹事 川口和樹

豊橋北ロータリークラブ 〒440-0075 豊橋市花田石塚 42-1 豊橋商工会議所内 Tel<0532>53-1000 FAX<0532>53-6447

第3232回例会

11月 25日 〈火〉

vol. 70 No. 15

ゲスト	小林寿来氏(学校法人桜丘学園 桜丘高等学校 平和委員会顧問) 増田壮汰さん(学校法人桜丘学園 桜丘高等学校 生徒会・平和委員会 2年生)
ビジタ一	豊橋ゴールデンRC(2名) 以上2名(サイン人数)
出席報告	会員 58名 欠席 20名 出席率 65.52% 前々回修正 97.96%
ロータリーソング	それでこそロータリー メニュー: 中華

会長挨拶・報告



高坂泰弘会長
始めに本日のゲストをご紹介いたします。学校法人桜丘学園桜丘高等学校 平和委員会顧問の小林寿来(としき)先生。同校生徒会 2年生の増田壮汰さんです。

先日『ネタニヤフ調書』というドキュメンタリー映画をユナイテッドシネマにて鑑賞致しました。イスラエル首相ベンヤamin・ネタニヤフの汚職疑惑の実態に迫ったドキュメンタリー映画です。彼は在任中に刑事起訴されています。汚職疑惑の捜査が進む中、ネタニヤフ本人や関係者への警察尋問記録の一部が極秘裏にリークされ、それを基にして本作が出来上りました。そこでは財界やメディアとの癒着、贈収賄、利益供与などの実態が明らかにされました。

この苦境を逃れるために、ネタニヤフは「パレスチナ人などというものは存在しない」と主張する極右勢力と結託して長期政権を維持し、司法改革にも手を付け自らの無罪を自論でいます。更にイスラム原理主義組織ハマスによるイスラエル攻撃への報復を口実として、極右勢力の求めるガザへの攻撃が今も続けられています。悲惨な戦争が為政者の意地でいとも簡単に起きてしまうということを私達は学ばなければなりません。

本日の桜丘の「平和の塔」にも結び付く話ですので、今回こちらの映画をご紹介させていただきました。残念ながら先週で上映は終わってしまいましたので、今週ご覧になられるのでしたら、本作とは打って変わって心温まる映画、山田洋次監督の『東京タクシー』を心よりお薦め致します。

桜丘学園には私の歳の差 3歳の二人の娘も中学校からお世話になりました。高校の英数科も含め、延べ9年間父母の会のお役を務めました。また中学校父母の会に至っては、周囲より迫られ、会長職を二度務めました。公立とは異なり脆弱な基盤の私立故に、先生方の熱意が非常に高く、否応なく巻き込まれたと言うべきかもしれません。

来年春にはいよいよ時習館高校が中高一貫校となり、国際的な教育プログラム「国際バカロレア」の段階的な導入を目指します。公立・私立の垣根を越えて、一層の切磋琢磨が求められます。少子化待ったなしの状況の下で、地域の子ども達は彼らが暮らす地域で育てることが重要だと思います。生徒達の中に地域への愛着を前提としたアイデンティティを形成し、世界に羽ばたいて行って欲しいものです。自分が生まれ育った国や地域について

いて自信を持って答えることができる、話すことができる人は、必ず周りからの信頼を得られると思います。それが世界標準であり、そうすることが教育の目的であると思っております。

【米山功労者 感謝状贈呈】

越智成幸会員



幹事報告

川口和樹幹事

なし

例会変更

12月5日(金) 蒲郡RC

12月9日(火) 豊川宝飯RC 田原パシフィックRC

例会休会

12月5日(月) 豊橋南RC

委員会報告

ロータリー財団委員会

川口和樹幹事

八木基之会員より 180 ドルの寄付がありました。有難うございました。

米山記念奨学委員会

松尾浩志委員長

八木基之会員より 1 万円の寄付がありました。有難うございました。

豊橋北RC 奨学金基金

藤井純一委員長

辻直樹会員、氏原憲志会員より 1 千円の寄付がありました。ありがとうございました。

理事会

川口和樹幹事
次週の例会は年次総会です。年次総会後は現代音楽作曲家の今井智景氏をお招きして「クロスメディアアートを通じた『シネマティック・プロジェクト』というテーマでお話をさせていただきます。

ゴルフ同友会

杉野公郎代表幹事
11/22(土)、23(日)に沼津方面にプチ遠征に行って参りました。東名 CC からは富士山が大変綺麗に見え、一日中富士山を眺めながらゴルフを楽しみました。次回は 12/21(日)です。同日に表彰式兼忘年会も開催いたします。

ニコニコボックス

河合修治会場委員

下山暢子会員	ゴルフ同友会遠征で東名 CC にて楽しいゴルフをプレーしました。ギブアップしたホールがシングルペリアではまり優勝してしまいました。参加した皆様、お世話になりました。
辻直樹会員	学校法人桜丘学園桜丘高等学校の小林寿来先生、増田壮汰さん、本日の講話を楽しみにしています。よろしくお願ひします。
高坂泰弘会員 川口和樹会員	学校法人桜丘学園桜丘高等学校平和委員会顧問、小林寿来先生、同 2 年生の増田壮汰さん。陽子豊橋北 RC へ。ご来訪を心より歓迎します。本日の卓話を楽しみにしています。よろしくお願ひいたします。

本日のプログラム

担当：青少年奉仕



辻直樹委員長

本日の例会は青少年奉仕委員会担当のクラブフォーラムです。通常であれば、友愛の広場でお酒を楽しんでいただけてから例会ということになりますが、高校生の方にお話を聞いていただくこと、しっかりとお話を聞いていただきたいということで、順番を逆にさせていただきました。

本日のゲストの小林寿来先生と増田壮汰さんは、夏休み期間中に全国 17 か所のヒロシマ原爆の残り火が納められている場所を巡り、様々なことを体験されました。その活動は新聞にも掲載されたそうです。しかしながら、このような活動をしているということを発表する場がなかなか無いということを先生からお伺いしましたので、当クラブのフォーラムでお話をさせていただきたいと申し出たところ、快く引き受けいただきました。

今回は「ヒロシマ原爆の残り火から見た平和への想い～次の 100 年を目指す、桜丘学園～」というテーマでお話をさせていただきます。私の息子も現在桜丘学園に在学しています。先日の学園祭にも行かせていただきましたが、中高生とは思えないような素晴らしいパフォーマンスの数々でした。この様な学校が豊橋にあるということに感動しました。

それでは小林先生、増田さん、よろしくお願ひいたします。

【ヒロシマ原爆の残り火から見た平和への想い

～次の 100 年を目指す、桜丘学園～】

小林寿来先生



小林先生(以下小林)：本日はお招きいただきましてありがとうございます。先日学園祭が終わり、この一つの大きな旅も終わり、何処かで報告する場が無いかと思っていたところにお声を掛けいただきました。本校が創立 100 周年、そして戦後 80 周年という節目に行ったこの活動をどうしても伝えたいという想いがありましたので、本日はお時間の許す限り聞いていただければ幸いです。平和の話だけでなく本校のこれまでの歩み、そしてこれからにもついてもお話をさせていただければと思いますのでよろしくお願ひいたします。

本日のテーマは「ヒロシマ原爆の残り火から見た平和への想い～次の 100 年を目指す、桜丘学園～」です。はじめに私達の自己紹介をさせていただきたいと思います。本校には平和委員会という委員会があります。各クラスから数名が参加しており、総勢は 100 名を超える生徒達の組織です。そこで現在顧問を担当しております小林寿来と申します。名前を音読みすると「じゅらい」となり、生まれ月も 7 月 = July です。

増田さん(以下増田)：桜丘高校 2 学年の増田壮汰と申します。学校では生徒会と平和委員会に所属し、毎日活動しています。本日は小林先生から学校紹介、私から夏休みに参加した「18・LINE(いちはちドットライン)」平和の旅について紹介をさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

小林：私は学校では「としき氏」というニックネームで呼ばれています。増田君は「まっすー」です。平和についての話となると、どうしても悲しい話、辛い話になることが多いかと思いますが、そうではないということを念頭に置いて、肩の力を抜いて話を聞いていただければと思います。

桜丘学園は 2025 年に創立 100 周年を迎えました。過去を振り返りながら、現在と向き合い、今度 101 年目、未来にどうつなげていくかということを考えております。「桜丘学園 100 年の歩み」をテーマに少しお話をさせていただきます。

本校は「信・望・愛」を建学の精神としています。我々教師は「すべては生徒の幸せのために」を合言葉として子ども達と向き合っています。学習、部活、自主活動において生徒が主役になれる学校づくりを目指しています。

「信・望・愛」の建学の精神を基に、満田樹吉・オリガ夫妻の「実学を身につける」ための学校を豊橋につくりたいという考え方から始まった裁縫塾が本校の始まりです。そして大正 15(1926)年に豊橋実践女学校として発足しました。その後、100 年間にわたり地元と向き合って参りました。

生徒の本分は学習であり、生活の基本です。まずはこの部分を充実させながら、様々な部活動にも力を入れています。私が以前顧問を務めていた和太鼓部は県大会で最優秀賞を受賞し、全国大会に出場したこともあります。

また本校では学園祭などの学校行事やイベントにも力を入れています。生徒が主役になれる学校づくりを目指し、様々な行事やイベントを行っており、特に学園祭を一つのゴールとしております。私が受け持っている学年では沢山の傘でモニュメント

を作る「アンブレラスカイ」という企画を行いました。また学年合唱も毎年実施しています。今年はHYの「時をこえ」という曲を合唱しました。沖縄出身の彼らが、自分の祖父母の言葉を聞き取って作られた曲です。

生徒を主役にするためにはどのようにしたら良いか、色々と悩んだこともあります。大切なのは、よりそう、見守る、待つということだと考えて、この三つを意識して子ども達と向き合ってきました。この様な取り組みを100年間少しずつ積み上げてきて、現在の桜丘があると思っております。

我々は平和学習を行う上で、政治的な話などは無にして、フランクなところで話をするということを意識しています。平和学習を「軽やかな平和活動」として位置づけて子ども達に投げかけています。「こうだ」というのではなく、「どう思う」という投げかけで終わることができる形でアプローチをしています。

桜丘の平和教育は、「豊川海軍工廠の悲劇」、「語り継がれる平和への想い」、「戦後80年桜丘平和記念式典」の三つがテーマとなっています。このテーマを柱として授業などに取り入れて、平和教育を続けてきました。

桜丘学園には「平和祈願像」が建立されています。この像は豊川運動公園内にある「平和の像」を基にして作られたものです。豊川海軍工廠で亡くなった方達の慰靈という思いが込められています。80年前、豊川海軍工廠の空爆で多くの方が亡くなりました。当時の豊橋桜ヶ丘高等女学校の生徒37名と1名の教師もこの爆撃によって亡くなっています。二度と繰り返してはいけない悲劇として語り継いできました。

戦争体験者である満田稔前理事長も、このことを我々若い世代に伝えられました。理事長職を務められていた時、毎年の創立記念日には平和についての話を中心にされていました。満田稔前理事長の「二度と繰り返してはいけない」、「若者を戦場に送ってはいけない」、「悲しい思いをさせてはいけない」という思いを、我々は教師として受け継いできました。この思いを更に次の世代へ伝えていかなければいけないと痛感しています。

本校の「平和の塔」は1989年10月15日に建立されました。「平和の塔」が広島原爆の残り火を灯し続けて36年になります。本校の残り火は福岡県八女市星野村にある「平和の塔」に灯されている「平和の火」から分火していただいたものです。

山本達雄さんという方が広島から原爆の残り火を故郷の八女市に持ち帰ったところから、平和の火の物語は始まっています。達雄さんは昭和20年8月6日、広島のに落とされた原爆で被爆しました。達雄さんは終戦後、広島に住んでいた叔父の安否が気になり、焼け野原となった広島に戻りましたが、叔父を見つけることはできなかったそうです。達雄さんは叔父が営んでいた書店の倉庫の中でくすぶり続けていた火を見つけ、その火を叔父の形見として故郷に持ち帰りました。

達雄さんはその火を供養し、また「恨みの火」として保存し始めました。達雄さんの息子さんの拓道(たくどう)さんから伺った話によると、達雄さんはこの火を使って復讐をしようと考えていたそうですが、一つ一つ赦すことで前に進んで行く内に「赦す火」に変わっていったそうです。そこに多くの人達の思いが合わさり、「平和の火」となったということです。

星野村は星野焼という焼き物で有名な土地でもあります。拓道さんは地元八女市で陶芸家として活躍されており、この原爆の火を窯の火として使っておられます。また語り部として子ども達に平和の火の物語を語り継いでいます。

桜丘学園の平和の塔は、平和の象徴として位置づけられています。本校は全国で唯一、広島の原爆の残り火を灯し続ける学校として、様々な思いを発信しています。

正式に分火された以外にも、条例ができる前に分火をされていた団体や、イベント用に採火した火を継続して灯している団

体などもあり、この火は全国に広がっています。達雄さんが残した思いは全国各地に残っているということを実感しています。

「平和の心」という言葉は本校の校歌にも含まれており、これを育む活動として本校は平和教育、平和学習を実施してきました。これらの思いは様々な活動として受け継がれています。私自身、平和委員会の顧問を引き継いだ時には、何をしたらよいのか分からぬという方が正直なところでした。そのような時に、ある方の「行動しなくては駄目だ」という言葉に動かされ、最初に取り組んだ大きな活動が2019年の「ピースリレー900」でした。

ピースリレー900は福岡県八女市から豊橋まで900kmの道のりを自転車に乗ってリレー形式でつなぎ平和を訴えるという活動でした。本来は講演活動なども行なったかったのですが、コロナの影響で全く実施できずに終わってしまいました。悔しい思いもしました。星野村では支所長とお話をメセージを頂いたり、平和の塔を訪ねたりしました。

2000年には魚乃目三太さんの『戦争めし』という漫画に本校の活動を取り上げていただきました。私自身が家庭科の教員であることと本校の「軽やかな平和活動」とを結びつけ、戦争当時は何を食べていたのかということに疑問を持ち、子ども達とともにそのことについて話をすることになりました。そんな中でこの漫画に出会い、「戦争めし」というものが豊橋にもあったのかを調査することになり、全校アンケートを実施しました。その結果や本校の活動を手紙で作者の魚乃目さんに送ったところ、出版元の秋田書店から是非取材をしたいという連絡があり、魚乃目さんも桜丘に来てくださいました。

魚乃目さんご自身も戦争のことを語り継ぎたかった、若い世代と関わりたかったという思いをお持ちだったようで、本当にトントン拍子で話が進みました。単行本では7巻に収録されており、カバーには生徒達と一緒に私もイラストで登場しています。先程紹介した山本達雄さんの物語、豊川海軍工廠で起きた物語、そして本校が取り組んだ戦争めしの物語も取り上げられていますので、機会があれば是非読んでいただければと思います。

2019年の沖縄への修学旅行での中山きくさんという方の平和講演は、私自身に大きな影響を与えてくれました。きくさんは白梅学徒隊に所属されていた方です。残念ながら数年前に亡くなられましたので、この時が最後の講演だったようです。

きくさんは子ども達に、「戦争は始まつたら止められない」、「行動しなければ意味がない、だから今行動しなさい」というメッセージを送ってくれました。何も大きなことではなく、勉強を頑張る、部活を頑張る、そういったことで変わる、その話を聞いて私も大人として何かやらなければと思いました。先輩の方々の思い、桜丘が大切にしてきた平和への思いを受け継いでいかなければいけないと感じました。

講演の後、生徒達からきくさんへのお礼として、「月桃」という沖縄の歌を贈りました。きくさん自身も涙ぐみながら一緒に口ずさんでくれていた姿が今でも忘れられません。また、きくさんはご高齢にもかかわらず、一時間程の講演中、ずっと立ったままお話をされており、その姿にも大きく感動しました。

中山きくさんがどういった思いを抱かれていたのか、気になった私は「白梅之塔」を訪れました。その時に掃除をされている方と偶然出会い、きくさんのお話を伺うことができました。元々きくさんは教員をされていた方で、その方はきく先生と呼んでいました。自分達の学校できくさんに講演をしていただいたということをその方に伝えたところ、「それなら先生はここにいらっしゃいますね」という言葉が返ってきました。どういうことかと尋ねると、きくさんは講演をされる時には亡くなった学友のことを思い、必ず白梅之塔を訪れてそのことを報告されるということでした。

その話を聞いて私は非常に心を動かされました。そして、中途

半端な気持ちではいけない、覚悟を決めなくてはいけないと強く思いました。中山きくさんとの出会いが私に覚悟を決めさせ、今に至るということになります。

戦後 80 年という節目である今年、本校では「戦後 80 年桜丘平和記念式典」を開催しました。式典では「18・LINE」の報告とその旅の中で各地で署名をしていただいた「ホシノ=サクラガオカ宣言」を発表しました。ホシノ=サクラガオカ宣言の内容は生徒が考えたもので、原稿用紙 4~5 枚程の文となっています。帰国子女の生徒が英語の先生と協力して英語表記の宣言文も作成してくれました。私達は何とかこれを広く発表できないかという思いを抱えています。戦後 80 年という節目の年に大きな式典を開催することができたということは、これまで続けてきた平和教育の結果の一つの形ではないかと思っております。

ここからは増田君にも加わってもらい、戦後 80 年平和企画「18・LINE(イチハチドットライン)」についてお話をさせていただきたいと思います。まずは「18・LINE」の概要について説明をお願いします。

増田: 本校はこれまで授業や活動を通して平和学習に力を入れてきました。今年、本校は創立 100 周年を迎えた年でもあります。この機会に改めて平和の重要性を訴えたいという思いから、今回私は「18・LINE」という企画に参加しました。この企画は、本校にも灯されている「平和の火」が全国 17 か所に分火されていることに着目し、その全てを巡ることで戦争の悲惨さや平和の火の意味を再確認し、広く発信していくというものです。私はその 17 か所全てを自分の足で巡り、平和の火を守り続けている人々の思いや各団体が行っている平和活動を知り、それを発信することを目標に出発しました。「歩くことで未来への希望を繋げたい」という合言葉の下、25 日間にわたる旅がスタートしました。

小林: 最初に我々が調べた時には 18 か所となっており、それに沿って企画がスタートしたのですが、その中の 1 か所は後継者問題で既に無くなっていました。いきなりそういった問題に直面して、巡る場所は当初の 18 か所から 17 か所になりましたが、その全てを自分達の目で見てきました。

次に桜丘の平和の火についてもう少し教えてください。

増田: 桜丘の平和の火にはとても深い意味が込められています。私達が普段身近に感じている火は料理をしたり、明るさを確保したり、温かさを与えてくれたりする存在ですが、本校を含む 17 か所が大切に灯し続けている平和の火には別の意味があります。それは平和を願う気持ちや、戦争を二度と繰り返さないで欲しいという強い祈りが込められている火であるということです。36 年前に建立された本校の平和の塔に灯る小さな火には、数えきれない程の多くの人々の思いや願いが宿っています。このことを知つてから私はこの火を単なる火ではなく、人々の思いが集まった希望の象徴だと感じるようになりました。それ以後、本校の平和の塔を見る時の意識も大きく変わっていきました。

小林: 今回の旅をするにあたり、特別に八女市星野支所内にある「平和の火」の元火を見せていただきました。災害が起きた際、星野支所の職員の方はまずこの火が保たれているかどうかを確認するくらいに大切にされています。この火を見せていただけたことも非常に良い経験となりました。

本校以外の分火団体の活動について教えてください。

増田: 全国 17 か所の内、今回は 2 か所を紹介させていただきます。一つ目は長野県茅野市で活動を続けている茅野市平和祈念式実行委員会です。茅野市運動公園内の駐車場に平和の塔が建立されており、毎年この前で茅野市平和祈念式を開催し、平和の尊さを訴えています。大人だけでなく中高生も式典に参加したり、市民に向けての映画の上映会や平和講演会などを開催したりしています。当の建立時には市民と企業と茅野市が手を取り

あい、資金を集めたという背景があることも知りました。多くの人の協力や実行委員会の皆様の努力によって、平和の火を守っている姿がとても印象的でした。

二つ目について紹介するのは、ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマを結ぶ「非核の火」を灯す会です。「非核の火」を灯す会は原爆の恐ろしさを伝えるだけでなく、原発事故による被害について継承していくために火を灯して活動されています。福島原発から近い福島県双葉郡楓葉町の宝鏡寺に平和の塔が建立されました。福島で起きた原発事故では、放射線という目に見えない闇の力が多く人の暮らしを奪いました。その話を伺った時、私は核というものが単に戦争の兵器だけを指すのではなく、人々の生活や自然を脅かす存在でもあるということに気づきました。「非核の火」という言葉には、核兵器、原発もない社会を願う強い思いが込められていると感じました。

小林: 特に印象に残った 2 つの団体を紹介してもらいました。楓葉町では案内していただく途中で「あそこの場所はまだ放射能が反応する」というような話を伺いました。一つ一つの火に人々の思いが込められているということを実感する旅となりました。

多くの方々と交流する中で見えてきた問題点もあったと思いますので、それについてお願いします。

増田: 17 か所全ての団体と交流して分かったことは、平和の火を灯し続けることが想像以上に大きな問題になっているということです。高齢化が進み、戦争体験者が少なくなり、戦争の語り部の減少が進んでいます。これが一つ目の大きな問題です。幾つかの団体では対策として、ICT を活用した記憶の継承や、若い世代への平和授業に力を入れていました。

火を 24 時間、365 日絶やさずに守るための管理維持費に関する事や、安全管理、災害への対策なども問題になっていました。問題を抱えながらも多くの団体が火を守り続けているのは、その小さな火に平和への思いが込められているからです。

小林: ある団体では安全面から昨年火を消してしまったという話を伺いました。私達も複雑な思いにはなりましたが、代表者の方の「この火は消えても思いは消えないで、ずっとこの先も守り続ける」という言葉からは強い意志を感じました。そういった現実も自分達の目で見ることができた、そこに思いがあると分かったことは、非常に大きな収穫でもあったと思います。

この旅を通じて「真の平和」ということについて私も増田君も色々と考えました。そのことについて教えてください。

増田: 私は「18・LINE」に参加するまでは、平和=戦争がないことと考えていました。確かに戦争が起きないということは一番大切だと思いますが、旅を通して気づいたことは、真の平和はもっと身近で特別なものではないということです。例えば学校から帰ったら当たり前のように家があり、家族と同じ食卓を囲みご飯が食べられること、こうした何気ない時間こそが実は一番平和な時間なのかもしれません。戦後 80 年を迎えた今、私達はただ過去を振り返るだけではなく、この日常の平和が失われないよう若き世代が積極的に行動していく必要があると感じています。誰かが守ってくれるのを待つではなく、自分達が未来的な平和を作る側に立つていてはなりません。真の平和とは、戦争が無いという状態だけでなく、誰かと笑い合い、安心して生きていられる日常そのものを守り続けていくことだと思います。

小林: これがこの旅を終えて彼が感じた感想です。夏休み前にも色々な話をしました。言い方は悪いかもしれません、その時の彼は本当に普通の高校生でした。平和に対する意識もそこまで考えていなかつたのではないかと思います。彼は人と出会いうことや実際にその火を見ることで、大きく変化していました。私は 25 日間一緒にいて、この瞬間に変わったとか、ここで何かヒントを得たとか、その様子を身近で見せてもらいました。若い世代が変わっていく姿を近くで見ることができたということは、

教師という立場にとっても大きな経験だったと思います。この夏、本当に大切な25日間になったと思っています。私自身は未だ独り身ですが、彼と旅をして親の気持ちも知ることができたように感じています。様々な思いを抱えながら25日間を一緒に過ごすことができたことは本当に貴重な経験だったと思います。彼の成長を見ることができて本当に良かったです。

「小さな意識の積み重ねが平和な未来に繋がる」、これも彼がこの旅を通じて残した言葉です。恨み、憎しみではなく、未来につなぐ姿勢、『受け継ぐ』だけでなく、『伝える』側になりたい、こういったことを学んだ彼が3年生になってどのように表現してくれるのか、発信してくれるのか、楽しみにしています。

まだ少し時間がありますので、「18・LINE」の中で一番の思い出について教えてください。

増田:新潟のスーパー銭湯でサウナの後、水風呂に入っていた時に、たまたまそこにいたおじいさん達が話しかけてくれました。そこで自分は愛知県から先生と一緒に平和の旅に出ているということを伝えたところ、その方は長岡空襲で親を亡くしたということを話してくださいました。今でも家から逃げる時に自分を抱えていた母親の顔は忘れないと言つてくれました。その時に自分は戦争=原爆ということにとらわれていたということに気づきました。実際には空襲でも多くの命が奪われている、そのことに気づき、空襲についてももっと勉強しなければ平和な未来嵌っていないと思いました。翌日、先生に空襲について学びたいと伝え、空襲の資料館を訪れて勉強してきました。

小林:丁度新潟から群馬に行く途中だったので、前橋空襲の資料館に行くことになりました。今まで受け身だった彼が、このおじいさん達と話をすることで何かを感じて主体的になり、自分から「ここに行ってみたい」、「これを知りたい」と思うようになったということです。これが学びであり、私達が本当に教えたかったことだと感じました。おじいさん達との出会いが彼にとって変わる良いきっかけだったと思います。地元でも豊橋や豊川海軍工廠等で大きな空襲がありました。こういったこととも結びついて一つの学習ができたということは良い経験でした。

「18・LINE」の活動を終えて、この経験を広く発信したいと私たちは考えています。それを支えてくれる大人が少しでも増えると、私達の活動も更に広がっていくと思います。この様な活動を通じて、私達の思い、若い世代の思いを伝えていきたいと思っています。平和の重要性を発信し続けることが桜丘の役割であるということを「18・LINE」を終えて学ぶことができました。

最後になりますが、これから桜丘は「楽しくなければ学校じゃない」を合言葉として子ども達と向き合っていきたい、こういった思いを教師一同持っています。高校生は一日約8時間、およそ3分の1を学校で過ごしています。この時間が辛いものだったら大変なことです。楽しくなければ学校じゃない、だから皆主役になろうということで、学校行事、平和教育に力を入れ、様々な活動をしてきました。学校でのプロレス興行、足湯、スランクショ自販機など、子ども達のドキドキ、ワクワクを形に変えていくのが私達教師ではないかと思います。

「桜丘プライド」をキーワードとして、生徒達一人一人に自信をつけさせ、桜丘の良いところを誇りにしようと位置付けたこともあります。増田君の思う桜丘の良いところはどんなところでしょうか。

増田:桜丘は全校で約1800名の生徒が在籍しています。先生方も100名以上いらっしゃいます。私にとっての小林先生の様に、気の合う先生が必ず見つかると思います。先生方は私達に多くのきっかけを与えてくれました。自分が目立てる場所を沢山与えてくれたお陰で、自分は今生徒会や平和委員会で活動を続けています。今、本当に学校生活が一番楽しいと感じています。

先生が仰っていたように、一日の3分の1の8時間が自分にとって一番楽しくて幸せな時間になっているということが、桜丘、桜丘の先生方の良いところだと思っています。

小林:ありがとうございます。生徒達には授業の中で桜丘の良いところを作文に書いてもらいました。部活動、学習、特色教育、学園祭、人間関係、先生との距離感、施設、卒業生など、様々なテーマの作文がありました。こういったことの一つ一つが子ども達のプライドに繋がっていくのだと思います。これから私達が大切にして以下中ればいけないものはこれだと感じています。

100周年を迎える、桜丘スタイルは新たな形に生まれ変わります。これを一つのスタンダードへに変えていきたいと思います。今後は「普通コース」と「文理コース」の二つのコースを軸として学園の運営をしていきますが、ベースにあるものは変わりません。学習、部活動、特色教育、勿論そこには平和教育も含まれています。こういったものを通じて新たな桜丘スタイルを築いていきたいと思っています。

そしてALL桜丘で101年目に挑んでいきたいと考えています。学校というと、どうしても生徒と教師の関係性を見てしまいがちですが、本校は保護者の方の力も大きいです。まずはこの三者が力を合わせて学校づくりをしていくという強い思いがあります。そこに地域の方との協力が加わり、桜丘のベースができるのだと思います。101年目からも同じように四者で手を取りあい、桜丘を作りたいと思っています。

ある先生は「面倒くさい教育をしよう」と仰っていました。遠回りをしても良いので面倒くさくてもやっていこう、その遠回りの部分にも意味があるのではないかということです。どうしても近道や簡単な道を選びたがりますが、そうではなく遠回りな教育をしてみよう、それが桜丘のDNAではないかとも仰っていました。私はその言葉を今も大切にしています。

桜丘は常に高みを見座し続ける学校でありたいと思っています。それには皆さんの応援も必要です。これをきっかけに桜丘学園、そして平和教育のことを知っていただければと思っています。

Q. 今の若い人達は言われたこと、教えられたことはできるけれどそれ以外のことができないということが多いように見受けられます、自主的、自発的に考えて動くという姿勢を持たせるためのヒントはありますか。

A. 小林:私が特に意識しているのは、子どもが飛び込む前にまずは自分が飛び込む、最初にやってみるということです。その姿を子ども達がどこかで見ているのではないか、そういったきっかけを与えることが教師、ひいては大人の役割ではないかと思います。大きなことでも小さなことでも、きっかけを一つ置くということです。勿論、全員に響くとは思ってはいません。その中の誰か一人でも見つけてくれないか、気づいてくれないかと思い、小さなきっかけを常に置くように意識しています。

Q. 今までにこれは失敗したと思ったことはありますか。

A. 小林:正直なことを言えば、日々失敗だと思っており、なかなかうまく噛み合ないうことが無く、悩むこともあります。先程の話ではないですが、私が毎日掃除をしていても、生徒達は帰りたいので早々に鞄を持ち出したりしています。普段からこれだけ言っているのに何で分からぬのかと落ち込んだりもします。それでも毎日言い続けることで変わってくる、誰か一人が変われば変わる、そういった場面を何度も見ているので、失敗してもとにかくあきらめないということは意識しています。

今回の旅の中で、私のミスで先方とのタイムスケジュールがうまく噛み合なかったことがありました。落ち込んでいた時に増田君が「自分達二人でやっている活動だから、僕が連絡をす

るので大丈夫」と声を掛けてくれたのです。本当に涙が出る程嬉しかったです。

失敗した時に生徒から学ぶ、フォローしてもらうこともあります。例え失敗しても得るものも大きいと思い、日々教育活動に取り組んでいます。

Q. 増田君に質問です。周りからの援助などで今、大変素晴らしい環境で過ごすことができていると思います。私にも子供がいますが、もしそういった援助が無かった場合、どうすればよいかアドバイスを頂ければと思います。

A. 増田:授業でも部活でも掃除でも、何でも良いので熱中して真面目にやっていれば、どこにいてもきっかけを与えてくれる人は必ずいると思います。何か一つでも熱中できるものを探してみるのが良いと思います。

【ロータリー情報委員会講評】 岡本敏幸 R 情報委員長



小林寿来先生、増田壮汰さん、ありがとうございました。アルコールが入っていたこともあるかもしれません、最後までしっかりとお話を聞かせていただきました。自分が高校を卒業してから 50 年程が経ちましたが、今の高校はこんなにも素晴らしい変わっているのかと驚きました。

原爆の残り火というものがあるということを私自身は知らなかったのですが、今回のお話でそれを知り、平和を目指す活動の一環として素晴らしいことだと思いました。また桜丘の皆さん、自分達の平和活動をきちんと周知されているということも知ることができました。

2024 年に日本被団協(日本原水爆被害者団体協議会)がノーベル平和賞を受賞しました。この様な活動をしていると、いつかは世界にも通じていくのだと感じました。

高校生の時から平和について考えるということは大切なことだと思います。桜丘学園を中心に今後更に活動の輪を広げていっていただければと思います。



監修・発行	会場委員会
写真撮影	会場委員会